研究資料

白描絵入本『源氏物語』（早蕨）の詞書断簡

秋山光和

一

「白描絵入本」の名で知られる『源氏物語』の古写本としては、「浮舟」の後半にあたる部分が、冊子装の形態をとどめて大和文華館に所蔵されており、また「浮舟」の前半部と「蜻蛉」の一小部分とは、江戸時代以来尾張徳川家に伝えられ、現在徳川美術館（徳川黎明会）に保存される。私は昭和三十五年から三十七年にわたり、これら両本の形態や内容、白描挿絵の図様や技法を調査研究したが、その結果は本誌二二七号に詳しい発表を行い[1]、当時屏風貼込の形で錯簡も多かった徳川本の復原をも試みたのである[2]。

この冊子本は、『源氏物語』諸伝本のうちでも特別入念かつ美麗な書写本であり、挿入された白描の源氏絵は鎌倉時代におけるいわゆる「白描やまと絵」の遺品として制作期も古く、優れた画致を有している。しかし現存の部分は源氏五十四帖のうちで極く一部にすぎぬ零本であり、「浮舟」の巻にしても後述のように首尾を欠き、中間にも欠落個所がある。「蜻蛉」については僅か七葉を留めるに過ぎぬ。従って失われた他の部分の出現が、断簡零墨であっても待望されていたわけである。

ところが先般蒐集家某氏から、近頃入手した古書画のなかに、私が嘗て紹介した大和文華館本「浮舟」冊子の巻頭の一葉に似て墨流し上に散し書きした源氏本文が見出されたとの吉報が齎され、日ならずして実物の提示をうけた。一見して明らかに同種の断簡であり、しかも内容は予想された「浮舟」の欠落部分に非ず、数帖を隔てた「早蕨」の一部に当るという、まことに興味ある新資料の出現であった。その料紙装飾や書写形態はこの部分に白描挿絵が伴っていたことを思わせ、しかも内容がかの徳川黎明会蔵「源氏物語絵巻」の早蕨の詞や絵とぴたり一致している点、「源氏絵」の考察にとっても、貴重な示唆を与えるものといえよう。そこで前回の論文を補充する意味においても、急遽本誌にその紹介を行うこととした（図版Ⅸ）。

二

新出断簡の記述に先立ち、まず現存「浮舟」冊子を概観しておこう。冊子形態を留める大和文華館本は原富太郎氏旧蔵品（松本幹一氏より入手）で、表紙の縦二三・七四cm、横一八・九cm。本来は粘葉装であったものが大和綴に改められ、現在三〇丁（六〇ページ）を数える。内容は「浮舟」の後半に当るが、最初の一丁は明らかに失われており、巻末でも八丁分ほどの文章が欠落している。料紙は稠密上質な楮紙で、白地に細かい雲母引きを施す。さらに第一丁表では瀟洒な墨流しを加え、本文を装飾的な散らし書きで書写している（挿図1）。しかも右端部の欠失状態を精査すれば、この墨流し料紙は本来見開き一紙分にわたるもので、散らし書きも右ページから続いていたと推定される。第一丁の裏も墨流しこそないがやはり美しい斜めの字配りで、本文が続けられる（挿図2）。次の一紙、即ち第二―三丁は絵の料紙に当てられ、見開きの二ページ（二丁裏―三丁表）に美しい白描挿絵が描かれ、背面（二丁表・三丁裏）は白紙のままに残されている。この絵の主題は、まさに先行する散らし書きの本文に対応し、匂宮が浮舟を対岸の隠れ家に誘い、一夜を明した翌日、端近く出て夕日に輝く雪の山を眺めつつ、歌を詠み交すという、趣深い情景である（挿図3）。すなわちさきの装飾的な本文の一紙は、絵に対する詞書的な意味合いをもち、またこの一帖が現状通り「浮舟」の後半で一帖をなしていたとすれば、巻頭部におけ

る見返し的な効果をも上げていたものと考えられる。以上既知の作例について先ず縷述したのは、新出断簡の性格を考える上で、それが示唆するところ尠くないと考えられるからである。

さて「浮舟」冊子は第一の絵のあと、第四丁表からこの古写本の標準の書写形態、すなわち一ページ十行、一行には十八字から二十五字を入れて整然と写し進められ、本文の中断もない。その間六丁裏―七丁表の見開きに墨流し（書写法は通常）、二十二丁裏に片面だけの白描挿絵、二十六丁裏、二十七丁表と最後の三十丁裏では料紙が墨流しで飾られている。前二例でみると、白描挿絵のあと一紙を隔てて装飾された料紙を交え、帖の構成に一定の変化を加えていたかと推察される。

徳川本はすでに料紙を表裏に分離し、屏風に散らして貼られていたため、原形を崩しているが、「浮舟」巻の前半部から本文二十三ページ分、白描絵三図（二ページ見開き一図、片面分二図）をとどめる。本文の間に脱落中断があるが、白描絵との関係で整理すれば(1)詞1～7　絵A、(2)詞8～13　絵B（二紙）詞14～19、(3)詞21～23　絵C、の三群に分けられ、「浮舟」巻頭の数ページ分と、大和文華館の冊子本へと続く数十ページ分が欠失している。徳川本では詞17・18の料紙に墨流しがあり、絵Bの後に変化を与えていたことを思わすが、装飾的な散らし書きの本文は、この前半部では現在見出されない。なお徳川本の屏風貼交には「浮舟」のあと、次の巻である「蜻蛉」の終末近い部分、七ページが加えられていたが、その中には墨流しの料

挿図1　白描絵入『源氏物語』浮舟冊子
第一丁表　大和文華館蔵

挿図2　同右　浮舟　第一丁裏

挿図3　同上　白描挿絵（第二丁裏第三丁表）（隠れ家で歌を詠み交す匂宮と浮舟）

紙は含まれていない。

かように現在五図の白描挿絵をとどめる「浮舟」冊子について、各画面の図様などは前記拙論に譲り、白描画としての特色のみを要約しておく。すなわち墨描の線は細いが、筆遣いは軽くしなやかで、同類の「枕草紙絵」「豊明絵」などの線描にみる無機的な冷たさを感じさせない。人物の顔貌表現も、十二世紀以来の伝統をいまだに留め、軽く細線をひき重ねて、微妙なニュアンスを示している。構図は明快で、人物や調度の形態も的確に処理されている。こうした比較からも、この冊子は十三世紀後半、それも中葉に近い時期の製作と考えてよかろう。

三

白描絵入本『源氏物語』に、早く逸出した断簡があるらしいことは、徳川本を調査した昭和三十七年当時すでに聞き及んでいた。(3) それは白描の源氏絵一図と詞書二葉、しかもその一葉には墨流しが加えられていたという。それが嘗て尾州家関係の某家から出たとのことでもあり、私は当然「浮舟」或いは「蜻蛉」の脱落部分にあたるものと考え、失われた図様を想い描いてさえいた。

ところが今回出現したのは、まさに墨流し、散らし書きの一葉ではあるが、「浮舟」よりは三帖を遡る、「早蕨」の一節にほかならなかったのである。

断簡の料紙ははやく表裏に分離され、薄い裏打ちを施したのみで、めくりの紙片として仮箱に納められている。一紙の縦二三・七cm、横一八・四cm。この法量を大和文華館蔵の冊子と比較すると縦はそのまま、横も大和綴の綴じ目の外側から紙端までのそれに一致する。すなわち周辺は切り揃えられても、大きな裁ち落しは無いことが分る。右端部の余白に比べて左端部の文字（後出本文㊇の末尾）がやや切れていることから見て、もとの綴じ目は左方にあり、この一片は見開き二ページ（すなわち粘葉装の一紙）の向って右側に当っていたことを思わせる。

改装の結果紙質はかなり荒れ、「浮舟」の冊子本料紙の特色といえる雲母引きは、左上部あたりに僅か残存するに過ぎない。さらに表裏に分割された際生じたと思われる紙の破れが下方に何箇所か見られ、裏打ち紙で補われている。しかし欠字はわずか二字（本文㊀第三行）にとどまっており、総じて墨痕もなお鮮やかで補筆入墨は認められず、細鋭で溌溂たる書風の特色をよく保持するといえる。

b「浮舟」第一丁表より　　a「早蕨」断簡より
挿図4　字形比較

この断簡が「浮舟」冊子と同種の古写本から逸出したことは、法量の点はもとより、大和文華館本第一丁表（挿図1）との比較によっても明らかであろう。細く切れのよい筆線を自由に動かし、鋭い抑揚をきざんでゆく、癖の強い技巧的な書風。細やかに配慮された散らし書きの字配り。さらに個々の字形においても、「あ」「や」「の（乃）」など通用の仮名のほか、草（変態仮名）の「を（越）」「ろ（路）」「た（堂）」や真名の「我」など、両紙面に共通する文字だけでも、同一手蹟と鑑するのに充分であろう[4]（挿図4）。

挿図5　「早蕨」断簡　散らし書き読み順（赤外線写真）

次に断簡の釈文をかかげた後、読下し文と物語中における位置をのべ、最後に『源氏物語』諸本との異文校合を試みたい。

［釈文］　㊀㊁…は挿図5中の番号に対応
①②…は異文校合（次ページ）を参照

㊀ ゐたり①」みな人は②」こゝろ[ゆき]」たる③」けしき」にて
㊁ ものぬひ」さはくをい④」ひかめる」かたちを⑤」も
㊂ しらすかほ⑦」つくろひ⑧」さはくに」いよ〳〵⑨」やつれて
㊃ 人のみないそき⑩」たちぬる⑪」そての」うら」に
㊄ ひとりも⑫」しほゝ」たるゝ」あま」哉
㊅ とうれへ⑬」きこゆれ」は
㊆ しほたるゝ」あまのころもに」ことなれや⑭」うき」たる
㊇ なみに」ぬ⑮らす」我そて
㊈ 世にすみ」つかむ事も」いと」ありかた」かるへき」ことに⑯」なん

以上の本文をそのまま漢字混り、濁点、句読点附きに書き流し、前後の本文を示すと次のようになる

（思ほし宣（絵巻詞）へるさまを語りて（はせつる）、辨はいとど慰めがたく（つつ）、くれ惑ひて（う））ゐたり。皆人は心ゆきたる気色にて、物縫ひ騒ぐ。老いひがめるかたちをも知らず、顔つくろひ騒くに、いよ〳〵窶れて（立・裁）（浦・裏）

（辨尼）人のみな急ぎたつめる袖のうらに独り藻鹽を垂るるあまかな（蟹・尼）

と憂へ聞ゆれば、

（中君）鹽垂るるあまの衣に異なれや浮きたる波に濡らす我が袖

世に住みつかむ事も、いとありがたかるへき事になん（覚ゆれ…）

吉沢義則氏「対校源氏物語新釈」、巻五、二〇八ページ　三～一〇行
池田亀鑑氏「日本古典全書」、巻六、一二三ページ一二行～一二四ページ四行
山岸徳平氏「日本古典文学大系」、巻五、二二ページ一五行～二三ページ四行

これは「早蕨」の後段。匂宮の愛情に不安を懐きながらも、中君は宇治を離れ京の匂宮邸に移る準備を進めている。前日、薫は宇治を訪れて移転の面倒をみながらも、弁の尼と悲しい心情を語り合い、世の無常を歎く。

薫が帰って後、尼は中君に薫の気持や言葉を伝え、薫への同情の念で心を痛めている。しかし都移りに満足している他の女房達は裁縫などに大騒ぎし、自分の老醜にも気ずかず化粧などに余念がない。弁の尼のみは一層悲しみにやつれ、やはり京に出る不安に心まどう中君と歌を応酬する。

この本文のうち、括弧に入れた冒頭「思ほし宣はせつる…」から中君の歌「……濡らす我が袖」までが、まさに「源氏物語絵巻」早蕨の詞（二紙）に該

当することは注目を要する。絵もまた、一方に「物縫ひ騒く」女房達を置き、左奥に中の君と弁の尼の、別離の悲しみを描き出している。失われた白描本の挿絵を思い描くためにも、何よりの手掛りとなろう。

次に断簡本文の『源氏物語』伝本としての性格をさぐり、「浮舟」「蜻蛉」のそれとも比較するため、諸本との異文関係を表示しよう（①②…の番号は前掲釈文中のそれに対応する。最初に断簡本文をゴチック体で示し、次に「源氏物語絵巻（絵と略記）」早蕨詞書の異文を、以下には「青表紙本系冊」、「河内本系河」、「別本系別」の諸本を、池田亀鑑氏『源氏物語大成　校異篇』巻三　一六八七～八八ページによって対校する）

①……**ゐたり**
まとゐてゐたり　絵
まとひてゐたり　河七毫源氏、為家本、大島本
まとひてゐたり　別保坂本
まとひたり　青河別

②**みな人は**
みなひと　絵
みな人は　青河別
みな人〳〵は　別保坂本

③**けしきにて**
さまにて　絵
けしきにて　青河別

④**さはく**
いとなみつつ　絵
いとなみつつ　青河別

⑤**をいひかめる**
おいひかめる　絵
おひゝかめる　河為家本・大島本
おひゆかめる　青河別

⑥**かたちをも**
さまを　絵
さまをも　別保坂本
かたちをも　別陽明文庫本、麦生本、阿里莫本
かたちも　青河別

⑦**かほつくろひ**
（ナシ）　絵
かほゝつくろひ　別保坂本
つくろひ　青河別

⑧**さはくに**
さまよふに　絵
さまよふに　青河別

⑨**やつれて**
やつして　絵
やつして　青河別

⑩**人の**
人は　絵
人は　青河別

⑪**たちぬる**
たつめる　絵
たつめる　青河別

⑫**もしほゝ**
もしほを　絵
もしほを　青河別

⑬**うれへ**
うれゐ　絵
うれへ　青河別

⑭**ことなれや**
おとらめや　絵
ことなれや　青河別

⑮**ぬらす**
ぬるゝ　絵
ぬるゝ　青河別

⑯**ことになん**
事になん　別保坂本
わさと　青河別

異文校合の結果をみると、短い本文とはいえ、この断簡はかなり興味ある特色を示すといえる。すなわち、青表紙本系、特にこの部分で『大成』が底本に用いた定家自筆本（保坂氏蔵）と異なるものが一一箇所あり、その場合この断簡のみの孤立異文が七箇所、他は別本系（特に保坂本）との一致や類似が目につく。また①―②においては河内本系三本（七毫源氏、為家本、大島本）との一致も指摘できる。この傾向は、嘗て中村義雄氏が大和文華館本および徳川本の白描絵入「浮舟」「蜻蛉」の本文系統を調査された結果[5]とほぼ一致するといえよう。それを要約すれば「浮舟」は比較的河内本に近い別本系本文であり、中でも高松宮家本、国冬本と一致もしくは近似する点が最も多い（保坂本はこの巻には存しない）。また「蜻蛉」も基本的には右と同様であるが、別本中でも保坂本と陽明文庫本に近いとされ、今回の断簡の場合と符合する。また両巻を通じ三系統の何れにも一致しない孤立異文の多いことも特色とされるが、本断簡においても短い文章中に六箇所もそれが数えられることは重要である。さらにまた同じく別本系に数えられる「絵巻」詞書との異同関係も注意に価しよう。

四

新出断簡が、その形態、書風、本文の性格など、何れの方面からみても白描絵入「浮舟」冊子と一連のものであることは、前記の考察で明瞭であろう。すると最初に述べたように、現存「浮舟」冊子でただ一箇所のみ加えられている、墨流し散らし書きの装飾性豊かな本文が、これに続く白描挿絵、それも両面続きの主要構図に対応する詞書的な役割をもっていたという事実が、改めて注目されてくる。すなわち「浮舟」のこの一紙と同じ意匠になる新出断簡もまた、その本文内容を絵画化した白描挿絵をその後に伴っていたであろうことをそこから類推するのは、さほど無理ではなかろう。もしこの推定が許されるならば、その白描源氏絵の画面は、十二世紀前半の彩色密画源氏絵、徳川黎明会蔵「源氏物語絵巻」の「早蕨」と、まさに同一情景を扱っているという点で、改めて大きな意味をもってくる。

前著『源氏絵』(注1参照)でも述べたように、現存する確実な源氏絵の遺品として、五島・徳川本絵巻のあと、鎌倉時代に入って最初に見出されるものは、まさにこの白描の冊子絵にほかならないのである。しかし、その図様として現在眼にし得るものは「浮舟」の五図のみであり、逆に「浮舟」の段は五島・徳川本では欠失しているため、年代的に相続くこれら両作例を、直接に比較するための手掛りは極めて乏しかった。ところが前掲の推論が可能になれば、両者は同じ巻から同じ一つの場面を選択したというイコノグラフィックな繋りではっきりと結び合わされたことになり、「源氏絵の系譜」のなかに相関的に位置づけられるのである。

一方また徳川本「絵巻」における「早蕨」の図は、これまで筋の上でさして重要性のある場面とは思われず、情趣性の点でも選択の意図が疑問とされていた。事実室町時代以降の「源氏絵」における「早蕨」の段としては、その冒頭、山の阿闍梨から宇治の姫君達に新春の挨拶に蕨や土筆が贈られてくる情景が絵画化されるのが普通であり、レパートリー・ブックともいうべき「源氏物語絵詞」(『源氏絵』巻末附載参照)において三場面を挙げた中にも、中君と弁の尼のこの別れの図は数えられていない。しかし若し、徳川本「絵巻」におけるその選択が制作者の思いつきではなく、あるいはまたそれが中世初期にかけて場面選択の伝統の中に組み入れられていったとすれば、この別離場面はやはり「早蕨」の巻中では趣深い段の一つとして当時の人々に特別印象深く受取られていたこととなり、その意味についても改めて考え直さなければならない。事実この場面は、皮相な都ぶりに憧がれ、浮かれ立つ女達と、運命の深い悲しみを静かに分かち合う姫君や老女という対照で、視覚的にも特異な興味を惹き得たものとも考えられる。

最後に若し、今回出現の断簡が、嘗て尾州家筋から逸出したと伝聞した残欠のうち「墨流しのある詞」に該当するとすれば、もう一枚の詞は表裏に剥されたその片面にあたり、さらに白描の絵も一枚あったというのは、これに伴う早蕨の図に当ると考えられはしまいか。詞書の断簡の出現を機に、やがてその絵もわれわれの眼前に現れることを、ひそかに念願しながら、われわれは今許された零細な資料から、出来る限りの情報を探り出すことに努めるほかはない。それこそが歴史家の責務であり、また欣びでもあるのだから……。

(一九七七年二月初旬寄稿)

注

(1) 秋山光和「白描絵入源氏物語、浮舟・蜻蛉の巻について」(『美術研究』二二七号、昭和三十八年三月)。なお同号は全冊がこの作品研究に捧げられ、秋山論文のほか鈴木敬三「浮舟の巻の白描絵の風俗について」、中村義雄「徳川本白描絵入源氏物語(浮舟・蜻蛉)の本文とその性格」が収められ、また同じく中村氏による徳川本・大和文華本の本文校刊が附載されている。

右の秋山論文は同著『平安時代世俗画の研究』(昭和三十九年、吉川弘文館)に加筆収録(第二篇第七章)されており、また平安時代から江戸時代初期までの『源氏物語』絵画化の展開を辿った著作『源氏絵』(昭和五十一年、至文堂)にも鎌倉

時代の主要遺例として、この作品を論じてある。

(2) 徳川本はその後各紙の順位を復原して巻子装に改められ、「源氏物語絵詞」という題名を新たに附加された。

(3) 名古屋の古書肆松本研次郎氏の談による（前記拙稿参照）。

(4) この筆蹟判定は、「浮舟」の多量な現存本文の草仮名使用頻度を、新出断簡のそれと比較することで一層実証性を増すことが出来る。なお前記拙論にも指摘したように、「蜻蛉」本文の書体は「浮舟」に近似してはいるが、総体に小ぶりで筆勢が弱く、別筆を思わせる。

(5) 中村義雄氏前掲論文および「大和文華館蔵源氏物語浮舟の本文」（『大和文華』一七号昭和三〇年）参照。

図版要項

一　歓喜天霊験記（原色版）　兵庫　武藤治太氏蔵

後巻　第一段（将門敗走）

二　同

後巻　第一段（将門討死）

三　同

後巻　第四段（羅刹国）

四・五　同

前巻

六・八　同

後巻

紙本着色　巻子装

前巻　縦三〇・〇糎　長サ七〇〇・五糎

後巻　縦三〇・〇糎　長サ九五六・二糎

一―八　宮次男「歓喜天霊験記私考」参照

九　白描絵入本『源氏物語』（早蕨）冊子断簡　東京　某家蔵

紙本墨書　一葉

縦二三・七糎　横一八・四糎

秋山光和　研究資料「白描絵入本『源氏物語』（早蕨）の詞書断簡」参照